

8月予報（全14枚）

病防第46号
平成22年7月30日

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）
平成22年度発生予察情報第5号を下記のとおり発表したので送付します。

平成22年度発生予報第5号（8月予報）

1 向こう1ヶ月の気象予報：平成22年7月23日福岡管区気象台発表（単位：％）

要素	予報対象地域	低い （少ない）	平年並	高い （多い）
気温	九州北部全域（含、山口県）	10	30	60
降水量	九州北部全域（含、山口県）	30	40	30
日照時間	九州北部全域（含、山口県）	30	40	30

2 発生予報の概要

作物	病虫害名	発生量		作物	病虫害名	発生量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
早植 水稲	穂いもち	㊦少	並	茶	炭疽病	㊦少	並
	紋枯病	並	㊦少		㊦ノカクエンハキ	並	㊦多
	トビイロウンカ	並	㊦少		チャハマキ	並	㊦多
	コブノメイガ	並	㊦多		チャノホソガ	㊦少	並
	カメムシ類	㊦少	並		㊦ノキロアザミマ	並	並
普通期 水稲	葉いもち	㊦少	少		㊦ノミドリメコバエ	並	少
	紋枯病	並	㊦少	かんきつ	かんざり病	㊦少	並
	トビイロウンカ	並	㊦少		かいよう病	㊦少	並
	コブノメイガ	㊦少	並		黒点病	並	㊦多

作 物	病 害 虫 名	発 生 量		作 物	病 害 虫 名	発 生 量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
かんきつ	ミカンハダニ	やや少	少	イチゴ (育苗床)	炭疽病	並	並
	チャノヒメアザミウマ	やや少	やや少		うどんこ病	並	やや少
	カガラムシ類	並	並		ハダニ類	やや少	少
ナシ	うどんこ病	並	並	夏秋 キャベツ (高冷地)	細菌性病害 (黒腐病等)	少	やや少
	ハダニ類	並	並		コナガ	やや少	並
果樹全般	カメムシ類	やや少	やや少	夏秋 果菜類	コナガ	並	並
夏秋トマト (高冷地)	葉かび病	並	やや多		アザミウマ類	並	並
	すすかび病	やや多	やや多	野菜全般	ハスモンヨトウ	並	並
夏秋ナス (平坦地)	すすかび病	やや多	やや多		オオタバコガ	並	並
夏秋キャベツ (高冷地)	べと病	並	やや少				
	褐斑病	並	やや少				

3 予想発生量、発生時期、根拠、対策等

水稲（早植）

1) 穂いもち

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、穂いもち（早期・早植）は発病株率 1.3 % (平年 10.3 %)、発病度 0.3 (平年 2.7) と平年比少の発生であった。

イ 病虫害防除員からの報告では、7月の発生は平年並～少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 穂いもちは、発生後は防除が困難になるので、予防防除を徹底する。

イ 粉剤、水和剤は、穂ばらみ期から穂揃い期に散布する。粒剤は、出穂 30～5 日前に処理するが、薬剤の種類によって使用時期が異なるので注意する。

2) 紋枯病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発生は認められず、平年比やや少の発生であった(平年の発病株率4.5%)。

イ 病虫害防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 要防除水準は穂ばらみ期の発病株率 20 % である。

イ 粉剤、水和剤は穂ばらみ期から出穂期に散布する。粒剤は出穂 30 ~ 10 日前に処理するが、薬剤の種類によって使用時期が異なるので注意する。

3) トビイロウンカ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、0.2 頭 / 10 株(平年 0.5 頭 / 10 株)と平年並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。

ウ 6月1半旬~7月4半旬の予察灯における誘殺数は、生産環境研究所(合志市)が93頭(平年91.5頭)で平年並、天草農業研究所(天草市)が4頭(平年26.3頭)で平年比少であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア 生産環境研究所(合志市)および天草農業研究所(天草市)の予察灯では、6月18~22日、7月12日、7月16日に飛来と考えられる誘殺があった。これらの飛来日を起算日とした有効積算温度(7月23日現在、熊本市アメダスデータ)による幼虫ふ化期は、6月20日飛来で8月10日、7月12日飛来で7月31日、7月16日飛来で8月3日と予想される(平成22年7月23日付技術情報第6号参照)。

イ 8月上旬に「100 頭以上 / 100 株」確認された場合には、幼虫発生初期に防除を行う。

ウ 水稻の株元に生息している。粉剤及び液剤で防除する場合は株元に達するように散布する。

4) コブノメイガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、1株当たり巻葉数0.76(平年0.3)と平年比やや多の発生であったが、発生の多い地域は県南に限られていた。

イ 病害虫防除員の報告では、7月の発生は平年並~やや多であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、6月3日、6月21日~23日、7月5日~7日頃の飛来と思われる誘殺があった。これらの飛来を起算日とした有効積算温度(7月23日現在、熊本市アメダスデータ)による次世代発蛾最盛期は、6月21日飛来は7月24日、7月5日飛来は8月5日と予想される(平成22年7月26日付技術情報第7号参照)。

イ 発生が多いほ場では、粒剤は発蛾最盛期、粉剤及び液剤は発蛾最盛期の1週間後に使用する。

5) カメムシ類

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比少発生であった。

イ 気象予報によると、8月の気温は高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 水稻出穂後における周辺雑草の除草は、本田への飛来を助長するために行わない。

イ 周辺より出穂が早いほ場は、飛来が多くなりやすいので注意する。

水稻(普通期)

1) 葉いもち

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病は認められず、平年並の発生であった(平年の発病株率0.7%、発病度0.2)。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並~少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

- (3) 対策 ア 葉いもちが発生し、上位葉への進展が見られる場合は薬剤を散布する。
- 2) 紋枯病
- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病は認められず、平年並の発生であった(平年の発病株率 0.1%)。
- イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～少であった。
- ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 要防除水準は穂ばらみ期の発病株率 20%である。
- イ 粉剤、水和剤は穂ばらみ期から出穂期に散布する。粒剤は出穂 30～10 日前に処理するが、薬剤の種類によって使用時期が異なるので注意する。
- ウ 8月の気温が平年より高く推移した場合は、7月が少発生であっても多発する傾向があるため、ほ場での発生状況には注意する。
- 3) トビイロウンカ
- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、0.02 頭 / 10 株(平年 0.1 頭 / 10 株)と平年並の発生であった。
- イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～少であった。
- ウ 6月1半旬～7月4半旬の予察灯における誘殺数は、生産環境研究所(合志市)が 93 頭(平年 91.5 頭)で平年並、天草農業研究所(天草市)が 4 頭(平年 26.3 頭)で平年比少であった。
- エ 生産環境研究所(合志市)における 7月 22 日の払い落とし調査(無防除田)では、成幼虫数が 0.3 頭 / 10 株で、前年より少なかった(前年 12.1 頭 / 10 株)。
- オ 気象予報によると、8月の気温は平年より高い予想である。
- (3) 対策 ア 生産環境研究所(合志市)および天草農業研究所(天草市)の予察灯では、6月 18～22 日、7月 12 日、7月 16 日に飛来と思われる誘殺があった。これらの飛来日を起算日とした有効積算温度(7月 23 日現在、熊本市アメダスデータ)による幼虫ふ化期は、6月 20 日飛来で 8月 10 日、7月 12 日飛来で 7月 31 日、7月 16 日飛来で 8月 3 日と予想される(平成 22 年 7 月 23 日付技術情報第 6 号参照)。
- イ 8月上旬に「20 頭以上 / 100 株」、または 8月中旬～下旬に「100 頭以上 / 100 株」確認された場合は、幼虫発生初期に防除を行う。
- ウ 水稻の株元に生息しているので、粉剤及び液剤で防除する場合は株元に達するように散布する。
- 4) コブノメイガ
- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、1 株当たり巻葉数 0.13(平年 0.15)と平年並であった。
- イ 7月中旬実施した一斉調査では、平年比やや少の発生であった。
- ウ 病害虫防除員の報告では、7月の発生は平年比やや多～少と地域によって差が見られた。
- エ 気象予報によると、8月の気温は高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、6月 3 日、6月 21 日～23 日、7月 5 日～7 日頃の飛来と思われる誘殺があった。これらの飛来を起算日とした有効積算温度(7月 23 日現在、熊本市アメダスデータ)による次世代発蛾最盛期は、6月 21 日飛来は 7月 24 日、7月 5 日飛来は 8月 5 日と予想される(平成 22 年 7 月 26 日付技術情報第 7 号参照)。
- イ 発生が多いほ場では、粒剤は発蛾最盛期、粉剤及び液剤は発蛾最盛期の 1 週間後に使用する。

茶

1) 炭疽病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病葉は 8.3 葉 / m² (平年 13.6 葉 / m²) と平年比やや少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多～少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 常発地では、摘採残葉の発病状況に注意するとともに、秋期の発生は翌春一番茶の収量・品質に及ぼす影響が大きいので、萌芽～3葉期に防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

2) カンザワハダニ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率 0.3 % (平年 0.6 %) と平年比やや少発生であった。

イ 茶業研究所 (御船町) の調査では、平年並の発生であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや少であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 一般に8月下旬ごろから発生が多くなる。茶園をよく観察し、密度が高い場合、十分な防除効果が得られにくいため、発生初期の防除を心がける。

イ 本虫の経済的被害許容水準は、卵、幼虫または成虫の寄生葉率 20 % 以下である。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3) チャノコカクモンハマキ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害葉数 2.3 葉 / m² (平年 0.8 葉 / m²) と平年比やや多の発生であった。

イ 生産環境研究所 (合志市) のフェロモントラップにおける誘殺数は、7月以降少なく、7月4半旬の調査でも平年比少であった。

ウ 茶業研究所 (御船町) のフェロモントラップにおける誘殺数は、平年比やや少ない発生であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや少であった。

オ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 生産環境研究所 (合志市) におけるフェロモントラップの平年の発蛾最盛期は7月5月半旬～8月1半旬である。ほ場を見回り発蛾最盛期から7～10日後の若齢幼虫期を対象に防除する。

4) チャハマキ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害葉数 0.3 葉 / m² (平年 0.1 葉 / m²) と平年並の発生であった。

イ 生産環境研究所 (合志市) のフェロモントラップにおける誘殺数は、7月2～3半旬に発蛾最盛期を認め平年比多であったが、4半旬には平年比少となった。

ウ 茶業研究所 (御船町) は、7月2半旬に発蛾最盛期を認め平年並の発生であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比少であった。

オ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

- (3) 対策 ア 生産環境研究所(合志市)におけるフェロモントラップの平年の発蛾最盛期は8月1半旬である。ほ場を見回り発蛾最盛期から7~10日後の若齢幼虫期を対象に防除する。

5) チャノホソガ

- (1) 発生量: やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発生を認めず平年比少の発生であった(平年の被害葉数4.6葉/m²)。

イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップにおける誘殺数は、7月1半旬には平年比多であったが、7月4半旬には平年比少となった。

ウ 茶業研究所(御船町)のフェロモントラップにおける誘殺数は、平年並の発生であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや少~少であった。

オ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

- (3) 対策 ア 産卵は新葉にのみ行われるので、三角葉巻前の秋芽萌芽期に防除する。

イ 本虫の経済的被害許容水準は、1m²当たりの巻葉数が30~50個以下である。

6) チャノキイロアザミウマ

- (1) 発生量: 並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率2.0%(平年2.6%)と平年並の発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)の粘着トラップ調査では、6月6半旬以降、少発生に経過している。

ウ 茶業研究所(御船町)の調査では、6月以降平年比少の発生で推移したが、7月5半旬にはやや多の発生となった。

エ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並~少であった。

オ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

- (3) 対策 ア 加害は新葉のみ行われるので、秋芽萌芽期に防除を行う。

イ 中切り等の更新園、摘採中止園などでは、茶芽生育期間が長く、長期にわたり被害を受けやすいので、残効の長い薬剤(合成ピレスロイド系剤、ネオニコチノイド剤)で防除する。

7) チャノミドリヒメヨコバイ

- (1) 発生量: 並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率2.5%(平年5.1%)と平年比やや少の発生であった。

イ 茶業研究所(御船町)の調査では、平年並の発生であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多~少であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

- (3) 対策 ア 本虫の経済的被害許容水準は、被害芽率5~8%以下である。

イ 新芽を加害するので、萌芽~1葉期に防除を行う。

ウ 発生時期が重なるチャノホソガ、チャノキイロアザミウマとの同時防除を行う。

カンキツ

1) かいよう病

- (1) 発生量: やや少

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、早生・普通温州の春葉、果実とも発病を認めなかった。
- イ 中晩柑類では、発病葉率 0.4 % (平年 3.7 %)、果実では発病を認めず平年比少の発生であった (平年の発病果率 6.9 %)。
- ウ 果樹研究所 (宇城市) の無防除の甘夏における 7 月 4 半旬の調査では、発病葉率 1.5 % (平年 5.0 %)、発病果率 22.0 % (平年 25.0 %) と平年並の発生であった。
- エ 病害虫防除員からの報告では、7 月の発生は平年比やや多～やや少であった。
- オ 気象予報によると、8 月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 発病した葉・枝・果実が伝染源である。特に春葉の発病葉は、果実、夏秋梢への感染源となるので剪除する。
- イ 夏秋梢のミカンハモグリガの食害痕に発生しやすいので、ミカンハモグリガを防除するか、夏秋梢を剪除する。
- ウ 強風 (風速毎秒 6m 以上) は傷を作り、病原菌の侵入門戸になるので、防風ネット等の対策を講じる。

2) 黒点病

(1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病果率 2.8 % (平年 2.8 %) と平年並の発生であった。
- イ 果樹研究所 (宇城市) の無防除の「興津早生」における 7 月 4 半旬の調査では、発病果率 94.0 % (平年 83.2 %)、発病度 16.9 (平年 24.6) と平年並の発生であった。
- ウ 病害虫防除員からの報告では、7 月の発生は平年比やや多～やや少であった。
- エ 気象予報によると、8 月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 直径 5 ～ 10 mm の枯枝は、保菌率が高く伝染源となりやすいので剪除する。
- イ 前回散布から累積降水量 200 ～ 250 mm または 25 ～ 30 日経過したら薬剤を散布する。

3) ミカンハダニ

(1) 発生量：やや少

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率 1.5 % (平年 11.3 %) と平年比少の発生であった。
- イ 果樹研究所 (宇城市) の調査では、寄生葉率 1.0 % (平年 3.4 %)、10 葉当たりの寄生頭数 0.1 頭 (平年 0.5 頭) と平年比やや少の発生であった。
- ウ 病害虫防除員からの報告では、7 月の発生は平年比やや多～並であった。
- エ 気象予報によると、8 月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 定期的に園を見回り、雌成虫の寄生葉率 30 ～ 40 %、10 葉当り 5 ～ 10 頭に達したら防除する。
- イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

4) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：やや少

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害果率 0.1 % (平年 1.1 %) と平年比少の発生であった。
- イ 病害虫防除員からの報告では、7 月の発生は平年比やや多～並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 有効積算温度シミュレーションで予測される各アメダス地点の第5世代の発生ピーク(防除適期)は、熊本が7月31日、三角が8月6日、八代が8月2日、水俣が8月3日、本渡が8月8日である。

第6世代は、熊本が8月16日、三角が8月23日、八代が8月19日、水俣が8月21日、本渡が8月26日である(7月22日現在の気象データから算出)。発生ピークは、今後の気温により変動し、地域によってばらつきもあるので、防除時期は、ほ場における発生状況を観察して判断する。

イ 果実洗浄発法で調査し、要防除密度である15頭/100果を越えた場合は防除する・

* 果実洗浄法

展着剤あるいは洗剤を5,000～10,000倍に薄めてコップやビーカーに入れ、液で果実(100果)を洗い、洗った液をティッシュペーパーでこし、ルーペや実体顕微鏡で虫数を計数する。

ウ 有効積算温度シミュレーションにて予測される発生ピーク(最新の予測は、ホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」を参照。

5) カイガラムシ類(アカマルカイガラムシ・ナシマルカイガラムシ)

(1) 発生量: 並

(2) 根拠 ア 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多～並であった。

イ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア アカマルカイガラムシの第2世代幼虫は7月下旬～8月上旬、ナシマルカイガラムシの第2世代幼虫は7月下旬～8月中旬に発生するので、薬剤による防除は効果が高い幼虫発生初期に行う。

ナシ

1) うどんこ病

(1) 発生量: 並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病を認めなかった(平年の発病葉率0.0%)。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 高温・乾燥が続く夏から秋にかけて多発しやすい。

イ 多発すると早期落葉し、樹勢が低下するので、発生初期の防除に重点をおく。

2) ハダニ類

(1) 発生量: 並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率1.3%(平年5.3%)と平年比やや少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 定期的に園を見回り、雌成虫の寄生葉率20%以上、1葉当り1～2頭に達したら防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

果樹全般

1) カメムシ類

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 生産環境研究所（合志市）の予察灯による調査では、チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシとも平年並の誘殺数であった。

イ 天草農業研究所（天草市）の予察灯による調査では、チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシとも平年比少の誘殺数であった。

ウ 果樹研究所（宇城市）の予察灯による調査では、チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシとも平年比少の誘殺数であった。

エ ヒノキ球果の口針鞘数調査（7月20～21日調査）では、県内10地点（熊本市河内町、宇城市（松橋、三角）、合志市、大津町、天草市（本渡、有明、栖本、新和）、苓北町）のうち最も値の高かったのは、天草市本渡で5.4、次いで天草市新和2.6であった。

オ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～やや少であった。

(3) 対策 ア 離脱（樹園地への飛来）の目安となる口針鞘数は、1球果当たり25個である。

イ 果樹園への飛来初期は局在するので、園をよく見回り早期発見に努める。

ウ 予察灯およびフェロモントラップの調査データおよびヒノキ球果の口針鞘調査結果は、ホームページ「<http://www.jpnpn.ne.jp/kumamoto/>」を参照。

野菜病害

夏秋トマト（高冷地）

1) 葉かび病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 夏秋トマト産地で導入されている品種は、ほとんどが葉かび抵抗性品種である。7月の巡回調査で葉かび病抵抗性品種を調査したところ、発病株率1.0%（平年6.3%）で平年比やや少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 県内では、葉かび病抵抗性遺伝子*Cf-9*を持つ品種に感染するレースが確認されている（平成22年1月7日付特殊報第1号参照）。抵抗性品種でも発病には注意する。発病した場合は、早期に慣行の葉かび病対策を行う。

イ 草勢が衰えると多発するため、肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。

ウ 換気を良くし、過湿防止に努める。

エ 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き、園外に処分する。

オ 早期発見に努め、発病初期のうちに葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行う。

カ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

2) すずかび病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率18.0%（平年 - ）であったが、発生ほ場は一部に限られていた。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多～並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 草勢が衰えると多発するため、肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。

イ 換気を良くし、過湿防止に努める。

ウ 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き、園外に処分する。

- エ 早期発見に努め、発病初期のうちに葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行う。
- オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

夏秋ナス（平坦地）

1) すすかび病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率 14.0 % (平年 5.2 %) と平年比やや多の発生であったが、発生ほ場は一部に限られていた。
- イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや少であった。
- ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 換気を良くし、過湿防止に努める。
- イ 伝染源となる発病葉は早めに取り除き、施設外へ持ち出し処分する。
- ウ 多発後は防除が困難なので、初期防除を徹底する。本病は葉裏から発生するため、葉裏にも十分かかるように薬剤散布を行う。
- エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

夏秋キュウリ（高冷地）

1) ベと病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多であった。
- イ 気象予報によると、8月の降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き園外に処分する。
- イ 肥料切れしないように適正な肥培管理に努める。
- ウ ほ場の排水を良くし過湿防止に努める。
- エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

2) 褐斑病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多であった。
- イ 気象予報によると、8月の降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き園外に処分する。
- イ 窒素質肥料の多用を避け過繁茂にならないようにする
- ウ 多発後の防除は困難なので、発病初期の防除に努める。

イチゴ（育苗床）

1) 炭疽病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率0.7% (平年0.5%) で平年並の発生であった。
- イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年やや多～並であった。
- ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア 降雨による病原菌の飛散を防止するため、親株床、育苗床にはビニールで雨よけする。また、全面マルチや高設育苗を行い、泥水の跳ね返りを防止する。
- イ 頭上灌水は避け、株元に手灌水する。
- ウ 育苗ポットの間隔を広げ、不要な下葉を除去し通風採光を良くする。

- エ 発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。
- オ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。特に、降雨後の摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので防除を行う。
- カ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

2) うどんこ病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率 4.3 % (平年 5.7 %) と平年並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多～並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア **盛夏期には新葉への病勢進展が抑制されるため、この時期に発病葉や不要な下葉などを取り除き、ほ場外で処分し、9月以降の伝染源を少なくする。また、定期的に予防防除を行う。**

イ 薬剤散布は葉裏に十分かかるようにする。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

イチゴ（育苗床）虫害

1) ハダニ類

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率 0.3 % (平年 7.5 %) と平年比少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア **イチゴのナミハダニは薬剤によって感受性が異なるため、平成21年7月17日付技術情報第5号(http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/H21/yosatsu/gi_jyutu090717.pdf)等を参考に薬剤を選択する。**なお、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統が異なる薬剤をローテーション使用を行う。

イ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。

夏秋キャベツ（高冷地）

1) 細菌性病害（黒腐病、軟腐病、黒斑細菌病）

(1) 発生量：少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発生を認めず、平年比少の発生であった（平年の発病株率 黒腐病3.1%、軟腐病0.3%、黒斑細菌病0.0%）。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多～少であった。

ウ 気象予報によると、8月の降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア ほ場の排水を良くする。

イ 被害残さの処分など、ほ場の衛生管理を徹底する。

ウ 発病後の防除は困難であり台風や大雨の後に多発するので、予防散布および風雨後に薬剤を散布する。

野菜虫害

夏秋キャベツ（高冷地）

1) コナガ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発生を認めず平年比少の発生であった（平年の寄生

株率 13.3 %)。

イ 病害虫防除員からの報告では、7 月の発生は平年比やや少～少であった。

ウ フェロモントラップによる 7 月の誘殺数は、阿蘇市波野で平年比やや少、山都町鶴底で平年比少であった。

エ 気象予報によると、8 月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早期発見、早期防除に努める。
また、幼虫は葉裏に寄生しているので、薬剤は葉裏まで十分かかるように丁寧に散布する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

夏秋果菜類

1) コナジラミ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7 月の巡回調査では、平坦地のナスではタバココナジラミが寄生葉率 7.6 % (平年 11.2 %) と平年比やや少の発生、高冷地のトマトではオンシツコナジラミを主として、寄生葉率 15.0 % (平年 19.0 %) と平年比やや少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7 月の発生はキュウリで平年比やや多～並、ナス、トマトで平年並であった。

ウ 気象予報によると、8 月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア ほ場内および周辺の雑草は重要な増殖源となるので、除草する。

イ コナジラミ類に対する防除薬剤は、種によって効果が異なるものもあるので、種を見分け、適切な薬剤を散布する。

ウ 早期発見に努め、薬剤散布は下位葉や葉裏など植物全体に十分かかるようにする。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7 月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生葉率 0.8 % (平年 5.6 %) と平年比少の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7 月の発生はナスで多、キュウリで平年並であった。

ウ 気象予報によると、8 月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色の粘着トラップを設置し、早期発見に努める。

イ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除草する。

ウ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

野菜全般

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7 月の巡回調査では、キャベツで寄生株率 1.7 % (平年 1.3 %)、イチゴ、トマト、ナスでは発生を認めず平年並の発生であった (平年の寄生株率イチゴ 0.0 %、トマト 0.0 %、ナス 0.3 %)。

イ フェロモントラップによる 7 月の誘殺数は、生産環境研究所 (合志市)、阿蘇市波野、山都町鶴底で平年比やや少、い業研究所 (八代市) 及び高原農

業研究所（阿蘇市）で平年比やや多であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生はイチゴ、トマト、ナスで平年並、キャベツで平年比やや少～少であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵することもあり、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら直ちに除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

オ 最新のフェロモントラップデータは、病害虫防除所のホームページを参照。

2) オオタバコガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、平坦地のナス、高冷地のトマトでは発生は認めず、平年並の発生であった（平年の寄生株率ナス0.2%、トマト0.1%）。

イ フェロモントラップによる7月の誘殺数は、生産環境研究所（合志市）高原農業研究所（阿蘇市）、い業研究所（八代市）、山都町鶴底ともに平年比やや少であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生はナスで平年比やや多、トマトで平年並であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、ほ場をよく見回り、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

エ 最新のフェロモントラップデータは、病害虫防除所のホームページを参照。

育苗期のコナジラミ類・アザミウマ類の防除対策！！

(1) 播種10日前までに育苗ハウス内・周囲の雑草を防除する。

(2) 育苗ハウスは本ぽと別に設け、ハウスの開口部（サイド、換気部など）には必ず目合い0.4mm以下の防虫ネットで、天井部は近紫外線除去フィルムで被覆し害虫の侵入抑制を図る。

(3) ハウス内に粘着トラップを設置し、侵入した害虫の密度を低下させる。

(4) 定植2～3日前に、定植予定苗の株元に登録のある粒剤を処理する。

(5) 発病苗は二次伝染源となるので、見つけしだい直ちに施設外に持ち出し処分する。

(6) 野良生えは重要な伝染源となるので、徹底除去する。

(7) 栽培を終了したハウスは、密閉処理により地温を高め保毒虫の飛び出しを防止する。

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底す

るとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行なうなど、危害防止に努めましょう。

詳しい内容等については 生産環境研究所病虫害研究室（病虫害防除所）
（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。
なお、本文はホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。